

オンラインによる音楽演習の学習効果：教員養成課程における個別指導（レッスン）を通して

著者	舘岡 真澄
雑誌名	埼玉学園大学紀要. 人間学部篇
巻	20
ページ	141-153
発行年	2020-12-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1354/00001331/

オンラインによる音楽演習の学習効果

— 教員養成課程における個別指導（レッスン）を通して —

Learning Effect of Online Music Exercises

Through Individual Instruction (Lessons) at a Teacher-Training Course

館岡真澄

TATEOKA, Masumi

1. はじめに

2020年冬に顕在化し、全世界で流行拡大している新型コロナウイルス感染症（COVID-19）によって、我々の社会生活全般は以前とは異なる形へと大幅な転換を強いられている。COVID-19は、教育方法にも大きな影響を与え、日本の高等教育機関の大半は対面授業からオンラインによる遠隔授業へ急遽変更され、これまでほぼ未経験であったオンラインでの教育に対して、多くの教員が短期間で遠隔授業の準備に取り組み、新学期を迎えることとなった。本学でもチャット、ファイル共有、ビデオ会議、その他の様々な機能を持ち合わせたアプリケーションサービスであるMicrosoft Teamsを使って、受講生たちが配布資料を読み課題レポートを提出する資料・課題提示型（自己学習型）の授業を主体として行われた。音楽実技に関わる科目の一斉授業では、資料・課題提示型（自己学習型）に加えてオンデマンド型（動画配信型）も取り入れて、そして個別指導を行うレッスンではリアルタイム型

（同時双方向型）で実施された。

元来、楽器や声楽などの実技演習は、指導者と受講生とが師弟関係を結び、その中で教育が行われていくものであり、受講生は指導者の芸術性や技術、伝承される演奏慣習などを定期的に、かつ直に学ぶ。この方法は今も継承され、実技演習では一對一の対面指導による技術修得が通例であり、COVID-19が発生する以前は、本学の音楽実技に関わる科目でもそれに類似した体制で授業が進められてきた。しかし、COVID-19の感染拡大を最小限にするためには対面指導を避けねばならず、Wi-Fiの環境が整っていない者や、鍵盤楽器を所有していない者、騒音問題に配慮する必要のある者など、自宅での受講環境が万全とは言えない若干名の学生が認められる中、5月上旬から約6週間にわたってオンラインを活用した遠隔授業が行われたのである。

2020年7月17日に発表された国立大学、公立大学、私立大学、高等専門学校を対象とする文部科学省の「新型コロナウイルス感染症の状況を踏まえた大学等の授業の実施状況」

キーワード：オンライン、音楽演習、遠隔授業、個別指導、レッスン

Key words : online, music exercises, remote teaching, individual instruction, lessons

1) では、全1069校のうち遠隔授業のみの実施は254校（23.8%）、対面と遠隔授業の併用は642校（60.1%）と回答された。また、対面授業のみの実施は173校（16.2%）であった。これらの結果から、遠隔授業は大半の学校で継続されていることが判る。音楽大学をはじめ、音楽実技の履修を必須とする幼児教育者および初等教育者などを養成する大学、専門学校などの高等教育機関でも、数ヶ月間におよぶ遠隔授業の継続的な実施によってオンラインを活用した授業がもはや日常と化し、音楽学習方法の選択のひとつとなっている。

今回の遠隔授業は事実上対面授業の代替である。しかし、吉田は「遠隔授業を教室の授業に近づけるだけでは、遠隔授業はいつまでも代替としての意味しか持たない。そうだとすると、教室の授業のオンライン化というのは、わざわざ質の劣るものを生み出す作業にしかならないことになる」（吉田 2001：51）と代替に対して忠告した。今回は有事における言わばやむを得ない遠隔授業の実施だが、単に授業の代替という位置づけではなく、遠隔授業の効果を分析し、まだ確立されていないオンラインによる音楽での有用な教育方法を見つけ出す貴重な機会ではないだろうか。

音楽教育分野における遠隔授業に関する研究は、国内の大学で遠隔授業の単位認定を可能と規定した1998年前後から盛んになった。その頃には小中学校におけるインターネットとデスクトップ・ミュージックを使った作曲による音楽交流（（財）ローランド芸術文化振興財団 1998）やテレビ会議を利用した中学校における国際交流の授業（田中 1998）が、それ以降も遠隔演奏専用システムの使用による遠隔レッスン（齊藤 2009）やeラーニングを活用した模範演奏DVDの視聴による遠

隔レッスン（深見、中平、赤羽 2009）などの研究が行われている。しかし、これらは専門的かつ高価なシステムを利用した、いわゆる通常授業での普及までには時間を要する特別な授業研究である。それに対して、現在では比較的安価もしくは無料で誰もが入手できるウェブ会議システムやインターネットを介してリアルタイムに会話をするシステムなどを活用した遠隔授業やレッスンが行われるようになった。しかも、COVID-19の影響によってその需要は驚異的に増加した。ただし、それはここ数ヶ月の話であるがゆえ、この研究はまだほぼ手付かずのままである。したがって本論考では、幼児教育者および初等教育者の養成機関におけるオンラインでの個人指導から得られる学習効果とその有用な方法の探究を目的として、本学の併設校川口短期大学のこども学科に在籍し、卒業必修科目「音楽Ⅰ」²⁾を受講する1年生18名³⁾（鍵盤楽器学習の初心者⁴⁾10名、経験者8名）を対象として、彼らが取り組んだ作品および曲数から見出される学習進度と自主練習時間とを過去2年間のデータと比較検討する。さらに、インターネットを介したコミュニケーションの特徴も考慮しながら遠隔授業の実施結果から見出される指導者の視点での指導効果と指導方法、および遠隔授業に対するアンケート⁵⁾結果に基づく受講生の視点から認められる学習効果と学習方法を考察する。

2. 遠隔授業の種別

オンラインによる授業方法は、おおよそ次の3種類に分けることができる。

①資料・課題提示型（自己学習型）

資料や課題を受講生に提示する形式の授業

である。指導者は、授業時間内に課題の添削指導を実施したり、受講生にレポートや演奏録音録画などの提出を求めたりする。それらに対して指導者は、授業時間内もしくは時間外にコメントで教示する。

②リアルタイム型（同時双方向型）

指導者と受講生との通信が同時かつ双方向に行われる形式の授業である。指導者は、テレビ会議システムなどのソフトウェアを使用して講義や実演などを行い、受講生はそれを視聴しながら学習する。

③オンデマンド型（動画配信型）

事前に用意した記録動画や記録音声を受講生へ提供する形式である。受講生は動画や音声を視聴した後に、指導者にレポートなどの課題提出を行う。この形式では、授業時間外での受講ができるため、受講生は本来の授業時間にその学習以外のことも実施可能となる。したがって、指導者や受講生が「②リアルタイム型（同時双方向型）」を活用するなどして授業時間内に互いに対話したり、受講生同士がコミュニケーションをはかったりする時間を設けることが推奨される。

以上の3つの方法から、指導者はそれぞれ担当する科目の特性と環境に応じて、実施可能な方法を選ぶ。遠隔授業は上記のうち単独の方法で行われることもあれば、複数を組み合わせるなど様々である。

3. 「音楽Ⅰ」における遠隔授業

川口短期大学においてオンラインを使って開講された授業「音楽Ⅰ」の第1回から第6回までの一斉授業の学習項目を表1に示す。

一斉授業では、初回から第3回までは「①資料・課題提示型（自己学習型）」および「③

オンデマンド型（動画配信型）」で行われ、その間、受講生は自主的に取り組んだ課題を各回終了後に専任教員へ提出する形式で授業が進められた。そして、第4回から第6回では表1の一斉授業の内容に加え、個人レッスンに相当するものとして受講生は演奏録音録画を作成し⁶⁾、かつそれを個人指導の担任である非常勤講師へ提出する形式での受講が課された。また、場合によってはPC、スマートフォン、タブレットなどを用いる「②リアルタイム型（同時双方向型）」のレッスンも実施された⁷⁾。

筆者は、オンラインを利用したレッスンの実施にあたり、対面授業と類似した形式、受講生にとって精神的に負担が少ないと考えられる形式などを考慮した結果、以下の3種類の方法でのレッスン実施を提案した。

④Zoom⁸⁾を使用したリアルタイムのレッスン

まず、通常のレッスンと同様にレッスン時間を定める。指導者は、受講生にミーティングIDおよびパスワードを記したレッスン参加を促すメール（招待メール）を出し、受講生は受信したメール内容に従って手続きをした後、レッスンの受講が可能となる。指導者は、受講生の要望、能力に合わせたピアノ演奏、弾き歌い、歌唱の各指導に加え、読譜やリズムなどのソルフェージュ指導および理論（楽典）など一斉授業で実施された課題を十分に理解していない項目の指導を直に受講生に行う。

この方法の最大の特徴は、画面を通じた対面レッスンということである。演奏や弾き歌い指導では、対面授業とほぼ同様に行える。しかし、運指などの細かい指導では、外付けのウェブカメラを使用したり、リズム指導で

表1 「音楽Ⅰ」の第1回から第6回までの一斉授業の指導内容

授業回数	一斉授業（実技・理論）の指導内容	
第1回	実技	「演奏のまえにすることと姿勢と指番号」 ・〔基本練習〕お辞儀の和音 ¹⁴⁾ ・〔基本練習〕半音の上下行 ¹⁵⁾ （動画付き）
	理論	「ト音記号・ヘ音記号の書き方と音の高さ」
第2回	実技	「5度の上下行の演奏法」 「打鍵と脱力」 ・〔基本練習〕お辞儀の和音（動画付き） ・〔基本練習〕5度の上下行 ¹⁶⁾ （動画付き）
	理論	「変化記号」 「音の長さ」 「ト音記号とヘ音記号の読譜（単音）」
第3回	実技	「5本の指をバラバラに速く動かす練習」 「12の調でドレミファソ」 ・〔基本練習〕5本指の全調課題 ¹⁷⁾ （動画付き）
	理論	「休符」 「付点音符・付点休符」 「リズム打ち・リズム唱」
第4回	実技	「「ちょうちょう」の全調課題」 「新曲の練習方法」 ・〔基本練習〕「ちょうちょう」の全調課題（12の調で弾く） ¹⁸⁾ （動画付き）
	理論	「コードネーム（chord name）和音の英語表記」 「コード伴奏のいろいろ」 「3つのコードを使用するわけ」 「リズム打ち・リズム唱」 「ヘ音記号の読譜（単音・和音）」
第5回	実技	「12の調のドレミファソの場所を探そう」
	理論	「異名導音」 「異名同音のコードネーム」
第6回	理論	「タイ」 「三連符」 「拍子記号」

はステップに加え両腕まで使った大きな動作で手を打ったり、音程指導では腕の動作も付けて音高を示したり、歌唱指導では顔の大袈裟な表情表出を用いるなど、音声だけではなく画面による視覚的側面からも指導内容を把握し易く配慮する必要がある。また、説明では音声の他、共有画面で資料を提示する手段もまた受講生により早く、そしてより深く理解させるために肝要である。

⑧演奏録音録画の提出によるレッスン

受講生は、自身の演奏をPC、スマートフォ

ン、タブレットなどを使用して随時録音録画し、そのデータをメールで指導者に提出する。指導者はそれを聴いて確認し、演奏に対する批評や助言をメールなどで返答する。必要に応じて、指導者も模範演奏や練習方法などの録音録画データを作成し、それを受講生に渡す。

この方法は、演奏録音録画を作成する受講生の撮影の技術力に左右される。すなわち、受講生は自身の演奏力を指導者に正確に把握させるために、明確な音声画像データの作成

が必須となる。また、指導者のコメントする能力によって受講生の理解度に大きな差が生じる。そのため、初心者にも解り易い言葉を用いた指導が必要とされる。

◎チャット⁹⁾を使用したリアルタイムのレッスン

これは、リアルタイムのメッセージ送信によるレッスンである。通常のレッスンと同様に、レッスン時間を定める。受講生は、曲目や演奏技術、理論などに関する疑問、質問などを挙げ、それに対して指導者は返答していく。

受講生の疑問、質問に指導者が敏速に対応し、「⑧演奏録音録画の提出によるレッスン」と同様に、初心者にも解り易い言葉を用いた指導力が必要とされる。ただし、音量やニュアンス、演奏時におけるバランスなど演奏に関する抽象的な項目の指導は不可能に近い。

筆者は、「音楽 I」での個人レッスンを開始する前に各学生（初心者10名¹⁰⁾、経験者8名¹¹⁾）に希望するレッスン方法を聞いた。そして、希望者多数であった「②リアルタイム型（同時双方向型）」の「④Zoomを使用したリアルタイムのレッスン」を主体に実施することを決定した。また、住環境など受講生の様々な状況に応じて「①資料・課題提示型（自己学習型）」の「⑧演奏録音録画の提出によるレッスン」や「②リアルタイム型（同時双方向型）」である「◎チャットを使用したリアルタイムのレッスン」も取り入れることにした。

これらの3つの方法を用いて、3回にわたる遠隔レッスンの中で、受講生は以下の曲目¹²⁾に取り組み、演奏基準における完成の段階に到達している（表2、表3を参照）。

表2 受講生（初心者、経験者）が3回の遠隔レッスンで取り組み合格した曲目と合格者数

※“R”は演奏録音録画での受講を表す。また、丸括弧内の数字は演奏録音録画型で取り組み、合格した人数を表しており、「復」はレッスン後の復習での提出を、「自」はレッスン前での自習としての提出を示す。

種別	曲目・項目	初心者の合格者数	経験者の合格者数
基本練習	・お辞儀の和音	7	4+R 1（自1）
	・半音の上下行	7	3+R 2（自2）
	・5度の上下行	6	3+R 1（自1）
	・12の調でドレミファソ	2	5
	・12の調でちょうちょう	1	3
必修曲 (10曲)	・あくしゅでこんにちは	1+R 3（自3）	5+R 3（復1、自2）
	・おかたづけ（実習）	1+R 1（自1）	2+R 1（自1）
	・おべんとう（実習）	0	1+R 1（復1）
	・おかりのうた（実習）簡易版	2+R 1（自1）	5+R 1（復1）
	・おかえりのうた（実習）	0	R 1（自1）
	・かえるの合唱	4+R 3（自3）	4+R 1（自1）
	・どこでしょう	1	R 1（自1）
	・ちょうちょう	4+R 1（自1）	2+R 1（自1）
	・ぶんぶんぶん	7+R 2（自2）	5
	・ひげじいさん	2+R 2（自2）	0
	・むすんでひらいて	1	2
選択曲 (童謡10曲以上)	・かたつむり	0	1
	・きらきらぼし	R 1（自1）	0
	・チューリップ	R 1（自1）	0
	・メリーさんのひつじ	2	0

表3 受講生（初心者、経験者）が3回の遠隔レッスンで説明のみ受けた項目と受講者数

種別	項目	初心者の受講者数	経験者の受講者数
説明のみ	・12の調でドレミファソ	1	1
	・12の調でちょうちょう	1	0
	・リズム	2	0

表2と表3から、初心者も経験者も一斉授業で資料提示された基本練習と個人レッスンで課された必修曲に意欲的に取り掛かっていたことが判る。また、1回のレッスンにおいて合格した曲数の平均を算出したところ、2.0すなわち2曲であった。過去2年の平均は、1.6つまり1～2曲の合格であり、これらの結果を比較すると今年度の方が多いと言える。その要因として、Zoomによる個人レッスンを受講する他に、復習や自習という形態で自らの演奏を記録し、その録音録画の提出を今年度の受講生の多くが積極的に取り組んでいたことが考えられる。受講生たちは、演奏録音録画を作成するにあたり、良い評価を得たいという思いから事前に何度も自主練習をしたという。それゆえ、今年度は過去2年間³⁾で見られたよりも完成度の高い演奏をして曲を仕上げる者が多かった。さらにアンケート調査によれば、遠隔授業時における受講生の一週間の練習日数は3.1日であり、平均3時間11分を練習時間に費やしていた。それに対して、過去2年間における受講生のデータでは平均2.8日で2時間28分となっている。これを比較すると今年度の受講生の練習日数、時間ともに多いことが判った。この理由のひとつとして、非常事態宣言の発令による外出自粛で多くの時間を練習に割いたことが考えられる。そして、「対面授業再開後よりも遠隔授業時のほうが練習していた」と述べている今年度の受講生7名は、平均5時間34分を一週間分の練習時間にあてていた。これらの結

果を見ると、今年度の受講生の学習進度が速いのは当然のこととも言えるだろう。

4. 遠隔レッスンの利点と問題点

前述した3種類の遠隔レッスンを実施した結果、指導者の視座からは表4に示したように全てのレッスン方法において利点と問題点が見出された。

「④Zoomを使用したリアルタイムのレッスン」では、常に通信状態が正常であるかどうか注意しなければならなかったことは大きな問題点だった一方、対面レッスンのように指導者と受講生とが顔を合わせる状況で、かつ直に対話をして受講生の理解度を確認したり、反応を感じ取ったりしながらレッスンを実施できたことは最大の利点である。また、音楽に関する学習項目の他に、今後の学校生活について不安に思うことなどのいくつかの質問を受講生数名から受けた。このレッスン形態は、学習の進行だけではなく受講生の精神的安定にも結び付いていたのではないだろうか。また、現時点における通信上の問題点とも言える音や映像のずれの発生によって、対面授業では可能な指導、例えば指導者と受講生とが同時に演奏したり、歌ったり、リズムを打ったりするなどができなかった。そのため、模倣による指導を徹底して行ったり、大きな動作や顔の大袈裟な表情表出などを用いた視覚的な指導を実践したりした。このように例年とは異なる指導方法も取り入れた結果、受講生たちの即時反応や暗記（暗譜）の能力、表

表4 指導者の視座による遠隔レッスンの利点と問題点

レッスン方法	遠隔レッスンの利点・問題点	
① Zoom	利点	<ul style="list-style-type: none"> ・対話をしながら指導するため、受講生の反応が確認できる。 ・受講生の演奏の問題点（音やリズムの間違い、演奏に適した運指、歌詞の発音、音楽のニュアンスなど）を直に指導できる。 ・受講生の疑問や質問に直ぐに対応できる。 ・レッスン時間が定まっており、集中して指導できる。
	問題点	<ul style="list-style-type: none"> ・常時、通信状態に注意を払わねばならない。 ・音や映像におけるずれの発生という通信の特性上、指導者と受講生が同時に演奏したり、歌ったり、リズム打ちなどを行ったりすることができない。
② 演奏 録音録画	利点	<ul style="list-style-type: none"> ・受講生の演奏を何度も確認できる。 ・随時確認できる。
	問題点	<ul style="list-style-type: none"> ・不定期的な指導である。 ・受講生の演奏録音録画提出と指導者の確認時間のずれが頻繁に生じる。 ・送付される演奏録音録画の状態（音量、撮影角度）によっては、音やリズム、運指、発音などの確認、判断が難しい。
③ チャット	利点	<ul style="list-style-type: none"> ・レッスン時間が定まっており、集中して指導できる。
	問題点	<ul style="list-style-type: none"> ・常時、通信状態に注意を払わねばならない。 ・音楽の抽象的な事柄に関する受講生の疑問や質問に対して、的確に返答できない。 ・音や声による確認ができず、かつ模範演奏を示すことができないため、演奏指導は不可能もしくは質の劣る指導になってしまう。

現力に例年以上の伸びが見られた。これらは学習進度の速さにも結び付いたと考えられる。その要因として、インターネット上でのコミュニケーションにおける安西の「限られた時間や空間の枠で切り取られた情報、しかもほとんどは視覚と聴覚の情報だけが送られ、受け手のほうではその限られた情報を頼りに脳の中で送り手の感情や意図を推測することになる。」(安西 2011: 262)、「情報は主にことばや映像によって与えられ、(中略) 限定された情報から多くの推論や想像を次々と巡らすような意識のはたらきが、より強く引き起こされる可能性がある。」(安西 2011: 263)という指摘、すなわちインターネットを使ったコミュニケーションにおいて人間が視覚と聴覚だけで知覚する情報の質や量、意識下でははたらきが、今回の能力向上に影響していると考えられる。また、受講生に行ったアンケート調査の質問「Zoomによる遠隔レッスン内容は理解できましたか？」に対する全員

の「理解できた」という回答や、「くわしく説明してくれたのでわかりやすかったです。」、「リズムの流れをイメージできるようになりました。」、「覚えられない(訳注: 暗記するのが苦手な)歌を練習して暗記できました。」などの肯定的なコメントからも、この方法が彼らにとって適切であったのは明らかである。

次に、「②演奏録音録画の提出によるレッスン」では、受講生から提出された演奏録音録画を指導者の自由時間に回数制限なく確認できることが利点である。しかしながら、受講生によっては演奏録音録画の提出は不定期であり、それがいつ送られてくるのかが指導者には分からない。つまり、指導者と受講生との間で演奏録音録画の提出期間と時間を定めない限り、指導者によっては指導時間や指導回数に気を揉むことが多くなる可能性も否定できないのである。また、送付された録音録画の状態によっては音が聴こえ辛かったり、画面が見え辛かったりして、的確な指導コメ

ントを書く段階までには至らず、受講生に再度の提出を求めることもあるかもしれない。さらに、演奏録音録画に対するコメントだけでは受講生に指導内容が伝わらない場合も考えられる。その際は、指導者も演奏録音録画の作成による対応が必要となり、担当する受講生の人数が多い場合は指導上の大幅な負荷がかかる可能性も否定できない。

「③チャットを使用したリアルタイムのレッスン」は、1度のみの実施であった。それゆえ、本論考では参考として記すこととする。これは「④Zoomを使用したリアルタイムのレッスン」と同様に、レッスン時間を定められるため集中して指導できることは大きな利点である。しかし、常に通信状態が正常であるかどうかを注意しなければならないことは問題である。そして、音色やニュアンス、リズムなどの実践に関する質問内容には、言葉だけの対応では不十分になることもある。また、指導者は実際に受講生の演奏の出来栄を確認できないため、チャットでの実技指導はほぼ不可能と考える。

このように、オンラインによる3つの指導方法を実施した結果、指導者の視座から最も指導し易く効果的なレッスンが実現可能であるのは、毎週同じ時間に指導ができて、対面レッスンのように指導者と受講生とが互いに対話しながら練習方法や演奏の手本を受講生の前で示したり、受講生の理解度を直ぐに確認できたりする「④Zoomを使用したリアルタイムのレッスン」であることが明らかとなった。

次に、受講生の視点による遠隔レッスンの利点と問題点を受講生アンケート調査の結果に基づいて考察する（表5を参照）。

表5に示したように、受講生も遠隔授業で

実施した3つの方法のほぼ全てに利点と問題点を見出している。

まず「④Zoomを使用したリアルタイムのレッスン」については、指導者の視点と同様に、初心者も経験者も通信状態の不安定さや、時に通信が途切れてしまうことを問題点として挙げている。さらに、自宅における音量に関する問題も確認できた。これは、騒音問題に発展する可能性も孕んでいるため、楽器の音量や声量を自ら注意するだけではなく、場合によってはレッスン時間や練習時間、録音時間などを近隣に知らせるなどの生活上の配慮も必要となるだろう。また、利点としてリアルタイムでの指導による分かりやすさをほぼ全員が実感したことが理解できた。そして、初心者2名が「気軽に自身のペースで取り組める」、1名が「十分な指導が受けられる」と利点を述べており、初めての個人レッスンが有意義なものであったと判断できる。さらに、経験者2名は演奏録音録画よりもZoomのほうが扱いやすいと感じている。上記の利点の他に、初心者1名は「不安が大きかったので、Zoomでレッスンできて良かった」、経験者1名は「一人の練習で不安だったことを先生にいろいろ聞けた」と言及した。このように、有事の状況下でも顔を見合わせ、かつ互いに直接対話できたことは、受講生が学習内容の理解や技術の向上を自覚するだけではなく、心のうちに秘めていた不安を多少なりとも和らげる効果をもたらしたのではないだろうか。

次に「⑤演奏録音録画の提出によるレッスン」については、初心者も経験者も受講生自身のペースでできることを利点と述べている。これは、受講生の意欲を高める上で重要だが、「分からない所がすぐに聞けない」、「直ぐにアドバイスがない」と問題点を挙げる受講生も

表5 受講生の視座による遠隔レッスンの利点と問題点

※コメントは、受講生による記載のまま、もしくは最小限の省略による抜粋である。また、丸括弧内の数字は、同意見の受講生の人数を示している。

レッスン方法	利点・問題点	初心者	経験者
④ Zoom	利点	<ul style="list-style-type: none"> ・わかりやすくてできた (10)。 ・先生と直接やりとりができる (6)。 ・気軽に自分のペースで取り組める (2)。 ・十分な指導を受けられる (1)。 	<ul style="list-style-type: none"> ・実際に指導されながらだから分かりやすい (7)。 ・直接話してわからない所を開ける (4)。 ・録音よりもやりやすい (2)。
	問題点	<ul style="list-style-type: none"> ・電波が悪い時がある (3)。 ・音の心配がある (1)。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ネットの回線がとちゅうできれたりする (1)。 ・使い方が分からずとまどった (1)。 ・音を上げないといけない (1)。
⑤ 演奏 録音録画	利点	<ul style="list-style-type: none"> ・自分のペースでひける曲からとんとんできた (3)。 ・自分の成果を確認できる (2)。 ・何回も見返せる (1)。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分のペースでできる (1)。 ・何回も繰り返し録画をみれる (2)。
	問題点	<ul style="list-style-type: none"> ・電波の悪さでみれなかった (3)。 ・けんばんと手を録画するのにカメラの位置を探すのが少し大変だった (1)。 ・まわりが静かなときに録音しなきゃいけないから録音するタイミングがむずかしかった (1)。 ・提出の仕方が分からなかった (1)。 ・ピアノに慣れていないからむずかしかった (1)。 ・分からないことをすぐにきけない (2)。 ・他の部屋に迷惑かけてないか心配 (1)。 	<ul style="list-style-type: none"> ・動画をとるときの場所が大変だった (4)。 ・動画が上手く送れなかった (1)。 ・分からない所がすぐにきけない (2)。 ・直ぐにアドバイスがない (1)。 ・かなり音を上げないと音が届かなかった (1)。
⑥ チャット	利点		
	問題点	<ul style="list-style-type: none"> ・文字だけの説明では少しわかりにくい。 	

少なくなかった。これらを解決する方法として、指導者と受講生とが都合の良い時間を定めることが挙げられる。これは、互いのすれ違いによるストレスの軽減に繋がるだろう。また、演奏録音動画を作成すること自体に難しさを覚える受講生が多いことも確認できた。一方、受講者アンケートの質問「あなた自身の録音提出による教員からの返答の内容は理解できましたか？」に対して、未回答の2名を除いた受講生16名は「理解できた」と答えており、「的確に教えていただいたので、自分の直す所を知れました。」「アドバイスが的確でよかったです。」「自分の歌い方にも問題があったことに気づきました。」などとコメントしており、受講生の大半がこの方法に満足

していたことが確認できた。さらに、第3項「音楽Ⅰ」における遠隔授業の中で述べたように、受講生たちは復習や自習などで自ら演奏録音録画を作成するにあたり、より多くの練習時間を確保した結果、完成度の高い演奏レベルに到達した。したがって、これも学習効果を高めるための訓練のひとつとして推奨される方法と考える。

「⑥チャットを使用したリアルタイムのレッスン」は、前述のように1度しか実施されなかった。そのため、本論考では参考として記す。受講生は、レッスンで声や音色のニュアンス、リズムのタイミングなどの実践に関わるいくつかの質問を行った。しかし、これらの質問は抽象的であり、受講生の疑問や質

問に対して文章だけでは的確に伝えることが難しく、受講生は十分な理解の段階までに至らなかった。それゆえ、チャットでの可能な指導項目および指導内容は、理論や歴史などの座学に限定されると考える。

以上のように、オンラインによる3つの指導方法を実施して、それらを比較した結果、受講生の視座から最も学習に取り組み易いレッスン方法は、「④Zoomを使用したリアルタイムのレッスン」であるのが明白となった。そして、受講生のペースで取り組んだり、目と耳で成果を実感したりできる「⑤演奏録音録画の提出によるレッスン」もまた受講生にとって魅力ある個人指導のひとつと捉えていることが認められた。したがって、遠隔授業における効果的な個別指導の方法は、これら2種類の方法の組み合わせと結論付けた。

5. 遠隔授業の今後の展望

「音楽Ⅰ」の遠隔授業が終了し、対面授業開始後、授業第12回目の個人レッスン時に行ったアンケートの質問「もし、「音楽」の対面授業が受けられない状況になった場合、あなたは、どの形態の授業を望みますか？」に対し、受講生からは以下の回答が得られた(表6を参照)。

表6に示したように、リアルタイム以外、すなわち資料提示型、オンデマンド型、演奏録音・録画提出型の授業を希望した受講生は6名であった。理由は「やり易さ」、「住宅環境への配慮」、「気楽さ」などである。それに対して、リアルタイムのピアノレッスンを選択した受講生は12名であり、リアルタイム以外の希望者の2倍もの人数がいることが判る。その理由として、ほぼ全員が「やり易さ」および「最も身に付く」点を挙げている。また、

そのうちの1名は「前やったときわかりやすくやりやすかった。」と述べたように、理解し易い方法と主張している。これは、学習意欲にも関わる重要な発言である。このように、半数以上の受講生は音楽の授業で技術や知識を修得するためには対面授業に類似した形態が望ましいと考えている。したがって、音楽のような実技を伴う授業ではリアルタイムでの遠隔授業における指導方法を軸として、指導内容および指導方法が充実するようにさらに検討、考察を進めていく必要があるだろう。

また今後は、オンラインの利用は有事の際における授業の術としてだけに留まらず、平時でも定期試験前のリハーサルや試験本番、課外講座など授業以外での活用の増大が考えられる。そして、台風、地震、大雪などの自然災害や予期せぬ事態に見舞われることの多い昨今、その対処法として、遠隔授業の開講も視野に入れるべきではないだろうか。自然災害などにおける現在の対応は、後日新たに補講日を設けて授業を行っている。災害やアクシデントの規模にもよるが、授業当日に開講可能な状況であればオンラインを利用することによって補講日の設定は不要となる。さらに指導者も受講生たちも災害による危険にさらされることなく、かつ誰もが予定や日課を変更するには及ばない。それゆえ、オンラインは大変実用的と言える。

このようなオンラインの利点、実用性を理解して積極的にそれを利用すること、そして対面授業で培われる学習効果との比較、検討、考察を行うことによって、遠隔授業の質は改善されていく。また、視覚と聴覚を最大限に活かした遠隔授業ならではとも言える指導方法の基盤を作り、体系化することが今後の大きな課題である。これは遠隔授業の発展に貢

表6 遠隔授業時に受講生が希望する授業形態

※これは、複数回答可能なアンケートである。授業方法の○印は、受講生が選択した各授業方法を示す。理由の欄に記された「その他」のコメントは、受講生による記載のままである。また、理由に続く丸括弧内の数字は、同意見の受講生の人数を示している。

授業方法				同じ授業方法を選択した者の人数と理由	
主に文字による資料提示型	映像配信を見て授業を受けるオンデマンド型	受講者の演奏録音・録画提出型	Zoomなどによるリアルタイムのピアノレッスン	人数	理由 (人数)
			○	4	・自分にとって方法が合っている(やり易い)から(3)。 ・自分にとって一番身に付くと考えているから(4)。 ・時間がかからず効率が良いと思うから(1)。 ・気分的に楽だから(1)。 ・その他(前やったときわかりやすくやりやすかった)(1)。
○			○	2	・自分にとって方法が合っている(やり易い)から(2)。 ・「音楽」の授業の進め方に最も合っていると考えから(1)。
○	○	○		2	・自分にとって方法が合っている(やり易い)から(1)。 ・住宅環境に配慮できるから(2)。 ・自分にとって一番身に付くと考えているから(1)。
	○	○		2	・自分にとって方法が合っている(やり易い)から(1)。 ・住宅環境に配慮できるから(2)。 ・自分にとって一番身に付くと考えているから(1)。 ・気分的に楽だから(1)。
	○		○	2	・自分にとって方法が合っている(やり易い)から(2)。 ・自分にとって一番身に付くと考えているから(2)。
		○	○	2	・自分にとって方法が合っている(やり易い)から(1)。 ・自分にとって一番身に付くと考えているから(2)。 ・「音楽」の授業の進め方に最も合っていると考えから(1)。
○	○			1	・自分にとって方法が合っている(やり易い)から。 ・住宅環境に配慮できるから。
○	○		○	1	・自分にとって方法が合っている(やり易い)から。 ・自分にとって一番身に付くと考えている。
	○	○	○	1	・自分にとって方法が合っている(やり易い)から。 ・自分にとって一番身に付くと考えているから。
		○		1	・自分にとって方法が合っている(やり易い)から。 ・気分的に楽だから。

献するだけでなく、いずれは音楽教育の発展にまで結びつのではないだろうか。

6. 結び

本論考では、「音楽Ⅰ」の第3回から第6回にわたって行われたオンラインによる「Zoomを使用したリアルタイムのレッスン」、「演奏録音録画の提出によるレッスン」、「チャットを使用したリアルタイムのレッスン」の3つの方法を、指導者および受講生の視座から確

認できる個人指導の効果および方法を中心に考察した。

遠隔授業は、どんな形態であれ通信状態が正常であるかどうかを常に注意する必要がある。特に、リアルタイムのレッスンは短時間で実施されるがゆえ、通信問題は遠隔授業での最大の問題とも言える。その反面、有事でも教育活動を継続可能とし、学習進度を前進させていく策のひとつであることが判った。

個人指導においては、指導者、受講生の両

者が互いに顔を見せ合う状況を生み出し、かつ直の対話を通して指導者は受講生の理解度を確認でき、受講生は内容の理解に加えて技術の向上も自覚できる「Zoomを使用したリアルタイムのレッスン」が最も効果的な方法であるのが明らかになった。そして、受講生の即時反応や暗記の能力、表現力の顕著な伸びも認められた。この要因として、画面を通じた視聴覚だけの情報に対する意識のはたらかきが影響したと考えられる。また、「演奏録音録画の提出によるレッスン」の実施によって受講生が復習や自習を行い、その結果、彼らの練習時間が増大して学習進度は速まり、さらに演奏の完成度は例年よりも高まっていることもまた確認できた。「チャットを使用したリアルタイムのレッスン」では、抽象的、実践的内容の指導を行うこと自体が難しいと言える。したがって、オンラインによる個人指導では「Zoomを使用したリアルタイムのレッスン」と「演奏録音録画の提出によるレッスン」との併用が、受講生の実力を総合的向上へと結びつける絶大な効果を発揮できる方法と結論付けた。

今年度前期における有事による不可避の遠隔授業の実施は、筆者にとっては音楽教育の意義を再考し、人と人との結びつきの重要性を再確認する大変貴重な機会でもあった。遠隔授業は、教育を発展させる可能性を十分に秘めているがゆえ、改善の余地は多大にある。そして対面授業と同等の、あるいはそれを凌ぐ程の魅力ある教育方法のひとつでもある。今後は、個人指導を含む音楽の遠隔授業での指導内容に主眼を置き、より効率的に実践できる学習効果の高い指導方法の探究を行っていきたい。

注

- 1) 2020（令和2）年7月1日時点での調査結果である。調査対象の公立大学および私立大学には、それぞれ専門職大学、短期大学も含まれている。
- 2) これは、1年次前期に開講される「教員や保育者として、子供に楽しい音楽あそびを展開するために必要な音楽基礎能力の講義とピアノ伴奏の演習を行う」科目である。理論や歌唱指導などを一斉授業する専任教員1名とピアノ実技や弾き歌いなどの個別指導（レッスン）を行う非常勤講師6名によって開講される。この授業では、受講生をピアノ初心者と経験者との2つのクラスに分割し、各クラスではさらに3、4名ずつのグループを構成して実技演習が進められる。一斉授業と個別指導の持ち時間はそれぞれ45分間であり、個別指導では一人当たり約10分強のレッスンを受講および聴講する形式で実施される。
- 3) 今年度、筆者が「音楽Ⅰ」でピアノ実技や弾き歌いなどを指導した学生である。
- 4) 短期大学入学後に初めてピアノ学習を開始した者に加え、鍵盤楽器学習1年未満の者も含める。
- 5) 2020（令和2）年6月30日（火）、7月28日（火）、8月4日（火）の3回にわたって調査を実施した。
- 6) これは「①資料・課題提示型（自己学習型）」である。
- 7) 本学園では、オンライン授業期間は「①資料・課題提示型（自己学習型）」での授業が推奨され、この形式を中心に実施していたが、操作方法を会得している教員は「②リアルタイム型（同時双方向型）」でも実施可能であった。
- 8) 時間、場所、端末の種類に関わらずウェブ会議の開催を可能とするビデオ、ウェブ会議システムである。PC、スマートフォン、タブレットなどでZoomをインストール後、使用することができる。
- 9) インターネットを介してリアルタイムに会話をするシステムである。
- 10) 初心者10名のうち、キーボードを7名、電子ピアノを3名が所有している。
- 11) 経験者8名のうち、キーボードを2名、電子ピアノを2名、アップライトピアノを2名、エレクトーンを1名が所有している。また、1名は鍵盤

楽器を持っていない。

- 12) 「音楽Ⅰ」では、ハ長調の必修曲10曲および選択曲として童謡10曲以上の取り組みと合格を課している。
- 13) 筆者が個人指導を担当した平成29年度川口短期大学1年生24名と平成30年度同大学1年生20名である。
- 14) ハ長調のⅠ→Ⅴ₇→Ⅰの和音進行である。右手は三和音を、左手は根音を弾く。
- 15) 1オクターヴの範囲で半音階上行形および下行形を弾く。
- 16) 1オクターヴの範囲で半音階上行形および下行形を完全5度音程で弾く。
- 17) 長調の全調課題である。1度から5度までの長音階の上行形および下行形を1フレーズで弾く。表2に示した基本練習「12の調でドレミファソ」も同じ内容である。
- 18) 長調の全調課題である。《ちょうちょう》の冒頭から第4小節までをⅠ→Ⅴ₇→Ⅰ→Ⅰの和音を用いて片手伴奏する。表2に示した基本練習「12の調でちょうちょう」も同じ内容である。

店：200-210。

- 深見友紀子、中平勝子、赤羽美希 2009「ピアノ弾き歌いにおける遠隔・非対面指導の効果と課題」京都女子大学『京都女子大学発達教育学部紀要』第05号(2009)：31-40。
- 吉田文 2001「第1章 IT先進国に見るデジタル・キャンパスの実態」株式会社アルク『バーチャル・ユニバーシティ IT革命が日本の大学を変える』：27-53。

(資料)

- 「新型コロナウイルス感染症の状況を踏まえた大学等の授業の実施状況(※調査時点令和2年7月1日時点)」文部科学省ホームページ、2020年7月17日。
https://www.mext.go.jp/content/20200717-mxt_kouhou01-000004520_2.pdf

【参考文献】

(和文献)

- 安西祐一郎 2011『心と脳——認知科学入門』株式会社岩波書店。
- 齊藤忠彦 2009「遠隔演奏システムを活用した音楽教育のデザインと今後の方向性—試行的な実践を通して—」信州大学『信州大学教育学部研究論集』第1号(2009)：117-126。
- (財)ローランド芸術文化振興財団 1998「ローランド・ハーモニー・プロジェクト-DTMを使った音楽交流学習—こねっと・プラン実践研究会編『インターネットが教室になった—こねっと・プランの挑戦—』高陵社書店：96-107。
- 田中博之 1998「テレビ会議とインターネットを用いた国際交流学習—中学校「選択音楽」から始まった日英共同プロジェクト—こねっと・プラン実践研究会編『インターネットが教室になった—こねっと・プランの挑戦—』高陵社書